カルタゴの滅亡と スキーピオー・アエミリアーヌス

楠　田　直　樹

はじめに

すでに第三次ポエニ戦争については，その戦争の原因を縷々述べてきた。北アーフリカーにおけるマシニッサのヌミディア王国の直接的な侵掠挑発，そしてローマ元老院内部におけるマールクス・ポルキウス・カトーのカルタゴ壊滅論とスキーピオー・ナーシカーのいわゆる「脅威の釣合」論，といったふうに，ローマの対カルタゴ政策あるいは第三次ポエニ戦争の原因などについてはすでに述べている[1]ので，当稿においては，実際に生じた戦争の経緯をスキーピオー・アエミリアーヌスを中心におき，述べていきたい。

ともかく，時間的にも空間的にも遠い地中海世界の中で生じたカルタゴの滅亡ほど現代の我々，特に我々日本人にとってショッキングな出来事はそうあるものではないであろう。というのも，このカルタゴと現代日本との間には，何かしら時間を越え，距離を越え，似たもの同士的な何かをイメージさせるものがあるからではないだろうか。また立場が異なるといえども，森本哲郎氏はその著書「ある通商国家の興亡　カルタゴの遺書」(PHP 研究所，1989年）の中で，カルタゴとローマを『経済大国（通商国家)』と『軍事大国』と対比しつつ，論をすすめ，そのあとがき（269頁）において，「二千年以上も前に栄えた『通商国家』カルタゴと，現代の『経済大国』日本のおかれている状況はよく似ている。私はこの稿をしたためながら，カルタゴの悲史が決してひとごととは思え

なかった。私は過去の歴史を安易に，現代のそれと結びつけるつもりはないが，…」と述べているが，ある意味で正しく正鵠をえているのではないだろうか。また同様なことを以前，弓削達氏が「古代貿易大国の滅亡　カルタゴ」(アラン・ロイド著，木本彰子訳，河出書房新社，1983年）の解説の中で，以下のように述べている。すなわち，「こんにち，ひとはカルタゴの歴史を読んで何を思うであろうか。経済立国の弱さを思うであろうか。軍事力補強の必要を説くのであろうか。貿易大国の，『砂上楼閣』性を憂うるであろうか。もしそれだけのことであるなら，歴史の教訓とは，あまりに浅簿な，短見的なことしか教えてくれなかったことになる。大国の横暴，大国同士の意地のつっぱり合い，そして一国利害のみを視野におく外交の基本意識。それがもし今，この核の世界に暴走したなら，何が起こるか。このことをこそ，カルタゴは無言のうちに物語っていると言うべきであろう。」と。ここにこそ，カルタゴが歴史の中で，滅亡後も脈々として生き続けているという事実があるのではないか。つまり，忘却の彼方として，忘れ去ることのできない何かが存在するのであろう。

ところで，共和政にはいったころのローマと地中海西部で絶対的な商業圏を確保していたカルタゴとの間で当初は通商条約が締結されたりしていたのであるが，一旦その利害が関係してくると，ポエニ戦争という前後三回にわたる地中海世界における雌雄を決する戦いでもって覇権を争っている。そしてローマそのものもこの三度のポエニ戦争を経ることによって，いわゆる『イタリア半島のローマ』から『地中海世界のローマ』へと飛翔している。また内政面においても大土地所有形態へと移行している。その両者の三度にわたる戦いの中で最初からその勝負がみえていたのが最期に行なわれた第三次ポエニ戦争であった。つまりローマの勝利は揺ぎのないものであった。いかなカルタゴであれ，北アーフリカーに閉じ込められていたままではどういうかたちであれ終戦を，自発的にか受動的にか求めるだけであった。先の二度にわたるポエニ戦争でそれほどの打撃を被っていたことも事実である。

さて，ここでローマとカルタゴとの両者間で生じた三度目の戦いの動機ともなったものは何であるのか，付言してときたい。表面的にはローマのカルタゴ

に対する『畏怖の念』Furcht というものが介在しており，それが我々ローマ史研究者をしてますます不明瞭に，歪曲的に，そして不条理にするのではあるが，第三次ポエニ戦争が勃発したのである，と Werner や Càssola が簡単直截に述べているのは印象的でもある[2]。これこそが，つまり『脅威の釣合』から次第に増幅してきたものである。しかしながら，この『畏怖の念』理論というのは，Walbank が言っている[3]ように，ただそれのみでこの戦争が論議の対象となっているものでもない。戦争の大きな枠組として正当性を帯びてくる，そういった類いの考え方でもある。それに対して，Mommsen, Rostovtzeff, Fraser や Piganiol などは，そうした『畏怖の念』のうえにカルタゴ重商主義経済の破綻を理由の一つにあげている[4]。そして，Kahrstedt, Gsell, Ferguson, Schur, Hallward や Kienast などは，ローマはカルタゴに対してではなく，ヌミディアに対して，つまりヌミディア勢力の北アーフリカー浸透を中断させる目的でもってカルタゴを破壊した，と断じている[5]。ともかく，現在ではこうした動因を主としながら，何らかの付加的な動因をプラスしてその必要かつ十分な条件を満たそうとしている。これとは別に，Adcock は農政経済的な側面からこの当時，つまり前二世紀中庸の政治状況というのは若干の史料の証言からして十九世紀末から二十世紀初期にかけての状況と一致するような節があるとも論じている[6]。他方では，こうした状況も鑑みて，Gelzer, Bilz, Zancan や Walsh などは，ヌミディアのマシニッサの勢力に限界があったとする立場をとっている[7]。それというのも，我々が保持している史料証言というのは全く不十分な信頼性の中で，本当に数限りない可能性を残してきたために他ならない。それに対して，戦前におけるこの戦争の捉え方は，単純にカトーの名と結びつけ，ローマにおける政治的路線のなかでのみ論議の対象とされていたようである。それが戦後になって，カトーとカルタゴ問題，つまり国家壊滅と根本的に分離する方向で考えられている[8]。そして地中海西部における際立った気質をもっているんだ，というふうに史料より考えさせられるというか，邪推するかのように方向性を育ませている気もする。当然のことながら，両者の間に戦いを避けようとする抑止力のようなものが働かなくなっていたことは確か

であろう。

そして，スキーピオー・アエミリアーヌスは都市カルタゴの炎上に際して，

> “ἔσσεται ἦμαρ ὅταν ποτ᾽ ὀλώλῃ Ἴλιος ἱρὴ
> καὶ Πρίαμος καὶ λαὸς ἐϋμμελίω Πριάμοιο.”
>
> （いつかはその日が来ようということ，聖いイーリオスもプリアモスもそのプリアモスのとねりこの，槍もよろしい兵どもも滅び去る日が。
>
> 呉茂一訳）

と落涙した，といわれている。カルタゴの最期はそれほどに悲惨であり，それほどに宿命的でもあった，ということを『イーリアス』の一節（6.448,449.）を用いながら，劇的に表現したのであろう。

そのカルタゴの最期に至るまでを述べることから始めたい。

1　第三次ポエニ戦争開始以前の状況

(a)　ローマ元老院内における状況[9)]

この戦いの前兆となったのが，前153年のカルタロのとった背反行動であり，前152年に位置づけられるであろうローマの使節団によるカルタゴの統治状況掌握であった。後者については，特にカトーのカルタゴでの見聞，個人的経験というのが，のちのローマの新たなアーフリカー政策導入への足掛りとなったようにもみえる。つまり，カルタゴの商業的再興隆を考えるだけでなく，ローマが仲裁しようと決心したときから北アーフリカーにおける敵対勢力——ただ単に政治的経済的な勢力を考えるのではなく，ローマのいわゆるアミキーティア関係を中心とする道義的心情的なそれをも考慮すべきであろう——というのを，その国土内に可視し，推測することは可能であろう。そしてそれが北アーフリカーにおいては，カルタゴであった，と考えるべきであろう。ともかくその思想的背景には，たぶんに個人的主観的な性質が見え隠れするのは否めないし，あの『強力』なカルタゴが脳裏に蘇るのも無理からぬところであろう。こうした状況の中で，カトーはローマの社会階層にその煽動を訴えかけ，カルタ

ゴに対する『畏怖の念』を焚き付けていった[10]。

それは取りも直さずカトーをしてローマ元老院の中でいわゆる一『党派』(un gruppo politico)の意見を代弁主張していたにすぎなかったし，その他方でスキーピオー・ナーシカーを中心とする他の『党派』があったことも事実であろう。彼は，史料の叙述で述べられている[11]，カトーとは正反対の立場を取っていたのか，というとそうは思えない節もある。その根拠となるものをここで簡単に明示しておこう。戦いの開戦以前，原則上は宗教上・法制上の性質をのみもとにして，つまり開戦直前になって，さらにもう一度政治上，特に外交上の性質を帯びた点で対立見解を余儀なくさせる部分が生じてきたのであろう[12]。つまり前150年になって，カルタゴは明らかに前201年に締結していた条件から逸脱した行動に出てしまう。そしてその時点においてもまだカルタゴはローマに対する宣戦布告を根拠のない，利害が合致しないが故に，今まで通り躊躇の姿勢に変わりはなかったし，ローマ自身も自らの内政上・外交上の理由からカルタゴを一種の『磨耗物』として必要としていたのであろう[13]。この点をして，ポセイドニウスなどのような後世の作家は，その叙述の中で，非歴史的な繋がりをもたらしくるカトーのカルタゴ破壊構想に対してスキーピオー・ナーシカーらの大いなる抵抗があったんだ，と見ている[14]。

そうした結果，前150年に至って，決定的な破局がやってくることになった[15]。ローマ元老院は，ただ単にポエニ戦争を開始するだけでなく，その戦いでカルタゴという国家の潰滅をも目論んでいた[16]。と同時に，協定を結び，開戦間近になって秘密裏に結託してしまった。そしてついにその翌年にはローマ自らの安全関与を伴ったカルタゴとの開戦を布告することに公然と意義付けをしてしまった，すなわちカルタゴの前150年の条約違反というものがその過失の最初ではない，と断言して[17]。それはあたかも一つの意見の主張として，ローマ元老院総体で考えを張り巡らせていたのとは正しく相違してきたとしても，ローマそのものがこの三度目の戦いを一つのサバイバルな防禦戦と捉え，押しつけるようなかたちとなったのは否めないところである。

(b)　第三次ポエニ戦争の序幕

ローマ元老院内部の状況については，前述の通りであるが，北アーフリカーにおける状況を無視することはできない。つまり，簡単にいえば，マシニッサがカルタゴに対して与えた困難かつ屈服的な敗北は，カルタゴの内政的能力の状況的変化をもたらせた，ということができよう[18]。ここで，カルタゴにおける民主的な『党派』の考えというのは後退りしてしまう結果になった。だからその代表的な人物であったボエタルコイ・カルタロとハスドルバルは，表面上は前者が国家指揮権を，そして後者が陸軍指揮権を有していたのであるが，百人会により他の被告人と共に結局は死罪を免れるのではあるけれども，その『党派』の代表者として死罪を宣告されている。そしてその見せかけの上での判決でもって，ローマが抱きつつあった前201年の条約破棄に関する憤激を中和しようとする試みが不調に終わったことも事実であった[19]。だが，ここで対岸のローマにカルタゴ自身の信頼を寄せていることを示す必要性にも駆られていたことも事実であった。というのも，カルタゴとマシニッサとの間の係争がローマ元老院にも報告され，その対岸に新たな軍団を配備して，元老院がその動員目的を公に知らせようとそうでなかろうと，リュビアまで海を挟んで移動しなければならないはめになろうとも，その準備については万端怠りなかったことも事実である。

こうした状況下にあったわけであるが，そのクロノロジカルな構成を取り敢えずはここに示しておこう。それも吟味をかねて，考古学的な立場を基盤としている Picard のものをあげておきたい[20]。ただし，年代は全て紀元前。

157	ローマの新たな仲裁
155	カルタゴで民主派，勢力を回復
153	カルタゴにカトーの使節団
152 ?	カルタゴにスキーピオー・ナーシカーの使節団
151 末	親ヌミディア派指導者，カルタゴから追放
150	オロスコパの包囲[21]
	マシニッサ・大平原とトゥスカ地方を併呑
	ハスドルバルを含む民主派指導者，カルタゴで死罪判決

149 初　　ローマでローマ・カルタゴ間交渉

　　ウティカ，ローマに寝返る

というふうに，開戦までの経緯を整理している。確かに若干の立場の違いはあるもののその時間的な流れという面では，理解するに問題はないであろう。

こうした概観を顧みながら，第三次ポエニ戦争開始までに至る，その序幕を考えてみたい。おそらく，前150／49年に位置づけられるであろうが，カルタゴのフェニキア系ライバルとして残っていたウティカをして，以後決定的な影響を与える決意に立ちながら，ローマに自らの国家を委譲する覚悟をした[22]。こうしたなかで，ローマは戦争終結への意欲を見せ，前149年のコーンスルに戦争処理を委任した。つまり，マニリウスは陸軍指揮権を，マルキウス・ケンソーリヌスは艦隊指揮権を保持して，ことに臨んだ。そして，軍そのものは八万名の歩兵と四千名の騎兵から構成されており，艦隊はその一方五段櫂船50隻，軽装艦100隻そして多数の貨物船や異なったタイプのものからなっており，その進撃方向はリリュバエウムであった，と史料では述べられている[23]。

こうしたローマ軍の作戦行動はカルタゴを意気消沈させるのに十分すぎるくらいであった。すでにマシニッサとの紛争でカルタゴ軍はその力にゆとりがなくなっていたことも蓋しであった。過去において繁栄を誇っていたあの海軍力は，すでに色褪せた状態であった。つまり，この時期に至っては，ローマの軍事的潜在能力は遙かにカルタゴを圧倒するものであった。そのうえさらにカルタゴにとって，厳しい状況に追い込まれていたのは，ローマ・ヌミディア間の協定の存在であった。だから，単なる外交手段では全く期待薄の状況が目に見えていた。しかし，その後に及んでも，ギスゴー，ハミルカル，ミスデス，ギッリマスやマゴを中心とする使節団[24]に権限を持たせてローマに派遣し，現状を打開すると共に，カルタゴに対してローマが派兵しないように訴えている。彼らがもってきた妥協内容というのは，ある意味においては無条件降伏 deditio をも辞さないというものであり，その情報をその当時のプラェトルであったグナエウス・コルネリウス・レントゥルスかあるいはルーキウス・ホスティリウス・マンキヌスのいずれかが元老院で公開したようである。そこで，元

老院はカルタゴの自治を，そして国家体制の存続を含めて，保証したようである。ただし，その条件として，三十日以内にカルタゴ元老院議員と政府の成員の子息三百人を人質としてリリュバエウム駐留のコーンスルに引き渡し，コーンスルの配置命令に従うこと，というものであった。なるほど，曖昧模糊とした文言『コーンスルの配置命令』という部分はカルタゴの疑惑を招くに十分な素地があった。しかしながら，それは避けることのできない所定の状況の下でローマ元老院の要求に応じざるを得ないカルタゴの弱みをも意味していた[25]。30日という期限ぎりぎりに，要求された300人の人質をリリュバエウムに移送し，その地を経て当時シケーリアのプラェトルであったクィントゥス・ファビウス・マクシムス・アエミリアーヌスを通じてローマに護送されている[26]。その人質を通じて，カルタゴは自らの代弁者としていたのだが，コーンスルを通して入ってくる情報に茫然自失の感を否めないようになっていたことも事実であろう。ウティカの例は，次々とでてくる要求をすでに示唆して余りあるものであった。

カルタゴが別の選択をした途端，コーンスルに更に公使を派遣すると共に，今度はウティカに対しても派遣した。ウティカにおける宿営地において，つまりそれはスキーピオの宿営地と同じと考えられるのだが，コーンスルが保持していたローマの軍団兵力と同等のものを統率しており，そこでとうとうケンソーリヌスはあらゆる武器の引き渡しを要求した[27]。それに対して，気の小さいといおうか気の弱いといおうか，そういう性格の抗議でもってその場を乗り切ろうとしており，そのせいか二万名の軍勢の先頭に立っていたハスドルバルに申し渡された死罪についてもただ同情するだけであり，コーンスルが与えた要求に不安を放任するようなかたちで無感覚に応えていたといえるであろう。その後で，ようやく切羽詰まった状況に陥って，全体の武装解除をしなければならなくなり，やっと公使派遣と相成った[28]。そこで，プーブリウス・コルネリウス・スキーピオー・ナーシカー・セラピオとグナエウス・コルネリウス・スキーピオー・ヒスパーヌスは公使とともにカルタゴに向かって出発した，もちろん歓待の裏があることを承知して[29]。

またその武装解除された武器，つまり二十万にもなんなんとする武器，ほぼ二千に及ぶ投石器[30]そして無数の投槍や投てき兵器を馬車に積み込んでの移動は，カルタゴからウティカに向かうものであり，その行進にはカルタゴの公使，行政府や元老院で重要な地位を占めていた人物たち，そして僧侶やカルタゴの中で重要な立場にあった人々が追従していた。こうしたカルタゴの名士たちは全く卑下した行進を続けることでコーンスルの共感を呼び起こし，ローマの広範な要求を少しでも和らげようとしていた。

このようなカルタゴ人たちの目的は，カルタゴ破壊を至上命令としていた元老院決定を胸中深く秘めていたコーンスルの胸のうちに届くどころか，その壁を破ることもできないでいた。カルタゴの名士たちは帰路を通じてかなりの時間をかけて，コーンスルを説得していたが，結局は骨折り損でしかなかった[31]。そしてそのもとで，ローマの最後通告というのは，分別のある態度決定として伝えられるべきものであったろう。外見上カルタゴ行政府全体の意思を代表していた30名の行政府成員は，説得に至らなかったために，ウティカにまで赴いている。そこでマニリウスは彼らにローマの決定的要求をぶつけてきた[32]。つまり，カルタゴはその国家を離れ，海岸線より80スタディオン内陸に入って新たに国家を建設すべきであろう[33]，というものであった。これに関しては，豊富な史料があり，別段問題を生じるわけではないが，その要求を受諾しようとしまいとにかかわらず，権力をしてカルタゴを術中に収めてしまったといえるだろうし，将来についても全くその問題の本質が変化することはありえないであろう。その後，公使団は狼狽状況を脱して，卑下した陳情者として大地に身を投げ伏せさえしている[34]。そこで，バンノ・ティギッラス[35]は一つの企て，つまりローマ元老院と新たな交渉の糸口を開いても構わないという許可を少なくともコーンスルから苦心惨憺して獲得しようとしたが，しかしながら，この望みはにべもなく拒絶されてしまった。そしてその最大唯一の公使団はカルタゴに土産物なく帰国しなければならなかったし，幾人かは途中で同胞から受けるであろう反応に恐れをなし逃亡していったし，ケンソーリヌスはカルタゴ近くにまで兵を進めてきた[38]。

状況がカルタゴにとって全く不利に展開している中で，さらにそれに輪をかけるように坂道を転げ落ちていった。すなわち，カルタゴ元老院の周辺で待機していた群集は，その通知を知らされるや，大波が押し寄せてくるがごとく政治的動揺が高まりを見せ，暴徒が公使団の方に殺到し，その悲劇の使者は砕け散ってしまった。イタリア系住民に暴行を加え，国家カルタゴの中でそのうねりがますます大きくなっていった[37]。それは政治家連中を通じてやっと所定の動きに戻ったようである。ただこうした急激に変化していく事情の中で和平維持という心中を吐露していたことも事実であろう。つまりローマの要求受諾が当然のことながら，まったく見込みのない戦争へと突入してゆくまでには，何らかの形で説得工作を続けてきたのかもしれない[38]。その日を通じて，元老院でローマに対する宣戦布告が決定された。そして軍事総動員可能兵員を奴隷や解放自由民にまで拡大していった[39]。さらに，指揮官として，死罪を申し渡していたハスドルバルを選出し，その指揮権を平地におけるものとして，マシニッサの孫に当たるもう一人のハスドルバルに都市内における指揮を任せることになった[40]。

2　第三次ポエニ戦争の経過

カルタゴにとってはどうにもやり切れない状況の中でローマとの最後の戦いが始まった。新たな軍団を形成したくともそれだけの手勢のなさが見えてくるだけであり，老若男女を問わず，自らの手で昼に夜をついでの武器調達製造を，カルタゴの聖なる広場で実践した。例えば，できうる限りの弩弓を作ろうと，婦女子は髪を切り，弦を作ったり，と[41]。こうしてカルタゴは来たるべくローマとの戦いに備えていた。

(a)　前149年：コーンスル，ルーキウス・マルキウス・ケンソーリヌス L. Marcius C. f. C. n. Censorinus とマニウス・マニリウス M'Manilius P. f. P. n.

一方，コーンスルは何らかの考えから都市カルタゴ攻撃を躊躇しており，一時的な戦争への熱狂的状況から冷静に戦争を分析するという方向へと柔軟に転

換していた。さらに言えば，この時期にはとくに派遣軍団への重要物資供給という立場から広義の意味における軍団維持に重点を移していたようである。そして短期的に軍事力に頼って，ハドゥリュメトゥム，レプティス・ミノル，タプソスなど，アコッラからウティカに至る地域を制圧していた[42]。それ以外の地域はまだハスドルバルの制圧権の中にあり，ネフェリス[43]を中心にしてウティカから先述の地域までの強い土地柄的な結びつきに頼って掌中に抑えていた[44]。

ここで，どうしても除外できない重要な観点がある。それはローマとヌミディアとの関係に他ならない[45]。つまりマシニッサの処遇である。ローマとヌミディアとの関係というよりも，もっと明確に言えば，ローマから派遣されたコーンスルとマシニッサとの関係，といった方が明瞭であろう。ローマ軍のウティカ上陸に際して，マシニッサは遅れてやってくるのであるが，それに対して，マシニッサは次のような内容の返答をローマ軍から受け取った。「諸君を必要とするときには，諸君に知らせるであろう。」と。そして彼はこれを甘んじて受入れ，待機という態度に耐えた。このマシニッサの行動には注目しておく必要があろう。

ともかく両コーンスルがウティカで行った準備というのは，お粗末なものであり[46]，都市カルタゴを遠巻きに包囲すべく，ケンソーリヌス指導の海軍そしてマニリウス指揮の陸軍，共にカルタゴから離れるという作戦を開始した[47]。その考えの中には，正面攻撃でもってカルタゴを堕落させるのは簡単だ，という頭があった。それでカルタゴに至る地峡に二つの宿営地を設営し，三度にわたる協同攻撃を開始したのだが，逆に簡単に跳ね返されてしまった。この緒戦で作戦行動を変える必要に迫られた。つまり前149年におけるローマ軍の遠征は全くといっていいほど成果がみられないものであった。ケンソーリヌスは，しかしながら，破城槌構築をまず考え，特別編成の部隊で建築用角材を求め，南下したのだが，カルタゴの騎兵隊長ヒミルコ・ファメアス[47 a]の一隊に襲われたりと難行苦行の攻撃準備であった。ケンソーリヌスはこの武器でカルタゴに至る南西の隘路にある要塞を攻撃し，突破口を見出そうとした。攻撃を受け

た損害箇所はカルタゴ側の徹夜になる作業でほぼ修復され，逆にローマの破城槌を使用不能にすべく，カルタゴ軍は一転攻撃に転じた。その間隙を縫うように，ケンソーリヌスは軍団を損害修復箇所の裂け目からカルタゴ内に送り込んだのだが，結局は逆に奇襲を受け，立ち往生したところを城壁下に兵を配置していたスキーピオー・アエミリアーヌスの機転で事なきをえ，撤退するだけという惨めなものであった。これがその年の七月の状況であった。そしてケンソーリヌスの軍団は，そのうえ潟湖付近の作戦上比較的都合の良くない位置に配置されていたため，犠牲を被り始めるという体たらくであった。そのため，宿営地もケッレディーネ付近の海岸線へと移動し，艦隊はその前に係留するという状態であった[47 b)]。

ここで，チュニス湾内における一般的な風向は北東からであり，その地に居住しているカルタゴ人にとっては都市城壁を保護しながら，ローマ軍の位置を明確にし，ローマ艦隊投錨地に向かって火船を放つのは容易であろう[48)]。そのカルタゴの戦略の成功により，ローマ艦隊は壊滅的打撃を被り，そのうえケンソーリヌスは選挙のためにローマに帰還せざるを得なくなり，北アーフリカーにおける軍団はマニリウスの単独指揮下に入った。

マニリウスは精力的に作戦行動を実施したが，その成果は今一つのものであった。彼は前進基地をシディ・ボウ・サイド付近のカルタゴ北方に移動し，カルタゴ包囲網を諦めて，軍事物資の補給に専心した。しかし安穏と補給できたわけではなく，再びヒミルコ・ファメアスがその行動の脅威の的となった。そこで一つの作戦として，彼はネフェリスにあるハスドルバルの基地を，冬の間に攻撃しようと計画した。当時軍団将校であったアエミリアーヌスは反対したが，その作戦計画を実行に移した[49)]。この作戦行動の中で，獅子奮迅の活躍をしたのはアエミリアーヌスであった。二つの主たる行動が残されている。一つは，軍団を絶望的山あいの地からの救出であり，もう一つは，撤退中に敵に取囲まれたときに逆に敵を取囲むという巧みな方法を実施させたこと。特に後者においては，殺害されたローマの軍団将校の埋葬のためにハスドルバルを説得したりしている。ともかく彼のこうした行動の中には，英雄化したがる後世の

史料の粉飾はあろうし，喧伝的な部分も多々あろうが，そうしなかったとはだれもいえないのも事実である[50]。

(b)　前148年：コーンスル，ポストゥミウス・アルビーヌス・マグヌス Sp. Postumius Sp. f. Sp. n. Albinus Magnus とルーキウス・カルプルニウス・ピソー・カエソニヌス L. Calpurnius C. f. C. n. Piso Caesoninus

この年の初め，アエミリアーヌスはマシニッサのもとに，彼が「我々があなたを必要とするとき，あなたは我々のもとに派遣されるであろう」と語っていたように，キルタへと派遣された。ローマの指揮官との間に存在していた確執を越え，マシニッサの要請に応じたものであった。というのも『当時の諸王の中で最も有能で強運の持ち主』であった古老の王マシニッサは，ようやくその長寿を全うしつつあったからである[52]。つまり彼の死後の王国存亡の問題があった。彼には，ミキプサ，グルッサ，マスタナバルという三人の合法的に後継可能な息子がおり，その利害関係は想像以上に複雑であったと考えられる。そこで，アフリカーヌスからヌミディア王とのパトロン関係を受け継いだアエミリアーヌスが，ヌミディアにとっては正しく親愛なる人物 persona grata として，この問題解決のため，派遣されたと考えられる[53]。結果的にはローマに有利に解決していった点においては，異論がないところであろうし，もはや単一国家としての面影を残すのみになっていたのも事実であろう。そしてアエミリアーヌスは，外交面を後継したグルッサを連れてカルタゴに戻り，ヒミルコ・ファメアスに対処しようとした。まさに，ローマの思惑通りに北アーフリカーの状況は展開し始めた。ヒミルコがローマに寝返ったのである。そしてその仕掛け人はアエミリアーヌスであった。

ところで，カルプルニウス・ピソーが艦隊指揮官として副官にマンキヌスを伴い，カルタゴに到着したときに，対カルタゴ戦略の方向転換があった。つまり当面カルタゴ包囲網に圧力をかけたりとか，ハスドルバル駆逐の戦略というものが明らかにならなかった。しかし，カルタゴとは同盟都市関係にあった，例えばクルペア，ネアポリスとかヒッポ・ディアリュトゥスなどの都市がカル

タゴから寝返った。その因果関係として，ローマの示した戦利品があげられるが，それ以上にローマが示した示威行動が恐れをなさしめたと考えるべきであろう。こうした諸都市の寝返りがカルタゴを圧迫したことは事実であるし，それが戦略的にみて，大した成果が上がらなかったとする[54]のは早計ではないだろうか。ただ，ローマとカルタゴとの，当時の力関係を考えた場合に，疑問が残るのは致仕方ないところである。しかしながら，カルタゴ側から見れば，正しく延命を図る戦いだと意識していたせいか，この年における行動はローマのそれとは比較にならないものであった。例えば，その根源となったのがヌミディアではあったが，マウリ人のヌミディア侵掠行動が後継者たちの軋轢を引き起こし，それを利用するかのようにヌミディア騎兵の一部をカルタゴ側に取り込んだり，あるいはマケドニアの王アンドリスコスにカルタゴ支援を求めたり，とローマの間隙をついた外交行動に出ていた。

ローマとしては，こうした状況を待ち望んでいなかったし，マンネリ化した戦局を打開しようという焦りまで出てきたのではないだろうか。それとアエミリアーヌスという人物がむすびつき，すでにローマに，いやアエミリアーヌスに投降していたヒミルコを伴うという彼の戦績を見せつけられては，世論の盛り上がりと共に，もはや選択の余地はなかったといったも過言ではなかった。コーンスルである。そして，副官に親友のラエリウスを指名した。ともかく，彼のコーンスル選出については様々な疑問が出てくるが，それについてはすでに若干論述しているのでここでは触れないでおきたい[55]。

(c)前147年：コーンスル，プーブリウス・コルネリウス・スキーピオー・アエミリアーヌス P. Cornelius P. f. P. n. Scipio Aemilianus とガーイユス・リーウィウス・ドルスス C. Livius M. Aemiliani f. M. n. Drusus

さて，アエミリアーヌスは，直接投票によってアーフリカーにおける指揮権を獲得し，ローマと同盟諸都市から補充兵を徴集し，前147年春には任地のアーフリカーに到着した。そこで彼がなした最初の仕事は，各史料間の矛盾はあるが，マンキヌスがすでにカルタゴ・メガラ地区に差し向けていた兵力の救出作

戦であった[55 a)]。例えば，その史料間の矛盾ということについて，App. はアエミリアーヌスの艦隊到着によって最終的には回避できるであろうという安易な考えから無謀な作戦が実施されていた，と伝え，また Liv. や他のラテン諸史料によれば，マンキヌス自身がある程度の成果を収めていたにもかかわらず，Polyb.による親スキーピオー的な説明によってそれが歪曲されているのではないか，と疑問をもっている，といった具合である。しかしここで，否定できないことは，ローマ軍の訓練を行い，その士気を回復することに重点がおかれていたということである[56)]。この期間を通じて，かれはローマ軍を再び戦闘能力が前面に出てくる軍団に仕上げた。

その一方で，カルタゴ軍は次にくるローマ軍の攻撃に対して準備可能な配備に集中していた。ハスドルバルがカルタゴに呼び戻され，ビュティアスがヒミルコに代わり，騎兵の指揮をとり[56 a)]，ネフェリスに駐屯していた部隊は，ギリシア人傭兵隊長のディオゲネスにその指揮を委ね，呼び戻されたハスドルバルは六千の兵力で三重の要塞防禦線の西側の地峡に配備されていた[56 b)]。それは少なくともアエミリアーヌスが陸路づたいにカルタゴを包囲する作戦をとったときに，それを遅らせようとするものであったようだ。

士気が回復した軍団を連れて，アエミリアーヌスはカルタゴに対して最初の行動に出た。つまり，メガラ地区西方の二つの要塞に攻撃を仕掛けた。防壁を越えて四千の兵力を侵攻させたが，そこは果樹園で無数の潅漑水路が交差し，戦闘には不向きな地形であったために，ためらうことなく撤退した。士気回復以前の軍団であれば，すでにカルタゴの地形も頭にあり，この『計画的撤退』は敗北の疑念を生じさせるものとなりうるであろうが，ここに戦闘に対する彼の用意周到さがある。それとは逆にこの点で計算間違いを犯したのはハスドルバルの方であった。自らの軍団の発意向上を熟考して，ローマに対して最期まで抵抗すべく，そして兵士を鼓舞すべく，ローマ兵捕虜に対して残虐行為に走った。ともかく，アエミリアーヌスは，このメガラ地区からの攻撃が，その背後に堅守のビュルサ地区やコトンを含む港湾地区を控えているために，容易ならざることである，と気づいた。それと共に，強襲によってしかローマの活路

が開かれないことにも気づいた。それでとりあえず軍備拠点構築によってカルタゴの強靭さと意志の強固さを飢えによって弱体化しようとした。

その軍備拠点構築については，全軍が昼夜を問わずに20日の間間断なく働き，カルタゴからの攻撃を受けながらのものであった。Polyb.によれば，二つの平行な塹壕が潟湖から潟湖へと地峡の距離，およそ25スタディオンに見合って築かれた，と[57]。そして塹壕の四辺形をした要塞が構築され，東側には見張り台を建設された。App.は，意識してか，この塹壕要塞の構造の多目的性を説明しようとしている[58]。ともかくこの要塞構築によって，カルタゴへの供給ルート並びにその行動を完全に遮断してしまったことは事実である。さらには，この要塞化でカルタゴの侵入に対して相対的に安全性を確保することにもなった。そういう攻守両用に渡る威力を発揮すると共に，都市カルタゴの全貌を目の当たりにするものでもあった。しかしながら，だからといって，港湾地区に至るまで連続的に攻撃できるような単純な都市構造をもっていなかった。

次に，アエミリアーヌスはカルタゴに海上から接近する供給行動に目を転じた。一見，ローマ海軍による効果的な封鎖を維持しゆくことは不可能のように見えた。しかし彼の計画は大胆なものであり，カルタゴ外港の南側を横切り，ほぼ700メートルにも及ぶ大堤防構築で港からの通常出入口を封鎖するというものであった[59]。カルタゴにしてみれば，その行動の意味を計りかねると共に，その緩慢な動きから計画そのものを不可能なものと思っていたのかもしれない。しかし，その計画の意味を悟った後のカルタゴの行動は，円形港から直接海路を建設するというもので，婦女子までも動員して素早く対応した。それと同時に，円形港では新たな艦隊建造という熱狂的な行動までとられた。その新艦隊はローマの海軍を叩くべくケッレディーネ沖に移動したが，その大胆不敵な行動力とカルタゴを守ろうとする高邁な精神とは裏腹に，ローマ艦隊攻撃の機会を逃し，何らかの海戦が報告されてはいるが，それは重要なことではない[60]。この翌日，アエミリアーヌスはカルタゴ商業埠頭の攻撃を開始し，攻城機を用いて戦略上のカルタゴ防衛拠点を叩いた。その夜のカルタゴ側の襲撃がローマ軍を恐慌状態に陥れたため，アエミリアーヌスは戦場放棄者を検挙するという

行動を取らねばならなかった。そして互いの根比べのような防禦攻撃が繰り返された。この込み入った戦況がカルタゴ攻囲戦を決定的な段階へともたらしていった。つまり，その年の晩夏には，攻囲を継続するための軍事的成果がほとんどなかった，という点で。というのも，カルタゴへの供給物資がまだどこからともなく到着していたからである。そのためこの冬の間に，そのルートを断ち切る戦略を立てた。その攻撃の主要目標は，ディオゲネスの指揮のもとネフェリスの要塞に陣地を構えていたカルタゴの軍団であった。ローマは，その主要目標を叩くべく，ラエリウス指揮下の一部隊を陸路から，そしてアエミリアーヌス自身の指揮のもとチェニス湾を横切る別部隊をそこに集中させた。と同時に，アエミリアーヌスはカルタゴ包囲網が維持されているかどうかの確認のため，ネフェリスとカルタゴとの間の連携を継続的にもっていた。その結果，ネフェリス要塞は陥落し，残るはまさしくカルタゴそのものだけとなった。

こうした戦況の中で，この冬，ハスドルバルは，グルッサを介在にして，ローマとの講和を求めようと打診していた。彼の計算では，新たに前146年のコーンスルがやってくるのをアエミリアーヌスが恐れているのではないか，という考えがあった。そのため，アエミリアーヌスがその講和を快く受け入れるだろうという思惑があった[61]。しかしながら，彼が自分を犠牲にしてまずカルタゴを救おうとした言質とは裏腹に，カルタゴの人々が飢えを凌いでいる間，この太鼓腹で赤面症の人物は，祝宴を開いたり，痛飲をしたり，の日々を過ごしていた。

3　前146年：カルタゴの滅亡

ともかく，アエミリアーヌスの指揮に関しては，この年も彼がカルタゴに止めの一撃（coup de grâce）を与えるべく，ハスドルバルの思惑とは逆に拡充され，そしてこの春早く組織的行動に出た。その彼の最初にとった行動は，宗教的なものであった。つまり，evocatio（神の召喚），その意図の中にはまさに陥落してゆくカルタゴの守護神を見捨てさせるものであった[62]。そして devotio（神の帰依），つまり独裁者とか将軍を運命づけ，カルタゴそのものや軍隊を逆に下界の諸権力

に捧げる，というものであった[63]。

一方，彼の軍事行動はといえば，カルタゴ商業埠頭劫掠から始まった。ラエリウスは，ハスドルバルが四辺形港付近に位置する木造建造物に火を放った混乱に乗じて，コトンの円形港にまで前進した[64]。そしてコトンとビュルサの間にある城壁に果敢に攻撃を加えた。そして夕刻までにアエミリアーヌスはカルタゴのフォルムまで突破した。その翌日，新たに四千に及ぼうとする兵力を注ぎ込んだが，それは戦闘というよりはむしろ略奪のためであった。それもローマの軍団がその奥に位置していたカルタゴのアポロン神殿を占拠し，その金泊に包まれた神殿を目の当たりにしたためであった[64a]。

そして攻撃の手が再開されたときに，ローマにとっては勝利への正念場となった。その前方にはエシュムーン神殿をいただくビュルサの要塞があったからである。フォルムからその要塞に近づくには，三本の急勾配の道なりがあり，それぞれの道なりの両側には高層家屋が立ち並んで，それがローマ軍の行く手を阻んでいた。そしてこの進撃の攻防戦は冷酷無比に六日間に渡って続いた。そこにローマは波状攻撃を繰り返し，アエミリアーヌスはその指揮官として，忍耐強くそして間断なく攻撃を指揮した[65]。その攻防戦の終盤にいたって，アエミリアーヌスは最終攻撃のために家屋という家屋を焼き尽し，広々とした空間確保のため石材除去を命じたせいで，家屋内に隠れていた老人，病人，負傷者が非業の死を遂げるという悪夢のクライマックスを現出した。そして行軍路の穴は死者で埋め尽くされていった[66]。しかしながら，大きな疑問として，この行動がアエミリアーヌス自身の計画でもってなされたのかどうか，あるいは瞬間的な感情の極みだったのか，が残る。ともかく，六日間にわたった市街戦の後に，籠城拠点よりカルタゴの嘆願者たちが若干数現れた。つまり，生命乞いであった。アエミリアーヌスがそれに同意した後に，五万名に及ぶカルタゴ攻囲戦の残存者，婦女子が裏門から姿を現した[67]。彼らはローマの監視下におかれた後，奴隷として売り払われた[68]。そして一段落した後には，ハスドルバルと妻，二人の子供，そしてローマ軍の戦場放棄者九百名が残され，しばらくの間エシュムーン神殿境内に留置されていた。その中で，最初にハスドルバル

の気力が萎え失せ，アエミリアーヌスの足下で生命乞いをはじめたが，それを見た彼の妻は夫を臆病者の売国奴と悪口罵言し，二人の子供を殺してから自らを炎の中に投げ込んだ。こうして焦燥感漂うカルタゴ攻囲戦は幕を閉じた[69]。

ただ，その後には都市カルタゴの物理的な破壊だけが残っていた。アエミリアーヌスの私兵を中心にしてローマ軍が都市の略奪を認められ，戦いのあとの貴金属宝物の略奪が行われた。そして，都市そのものは十日間にわたって燃やし尽くされ，フェニキア・カルタゴの歴史的実体は物質的にも政治的にも地中海から姿を消し去ってしまった。

このように，カルタゴが炎上粉砕される最期の段階で，アエミリアーヌスが涙して，その『運命』の不整合さや『人事』の道義性をそこに見たというエピソードがあるが，これはあながち信じられないことではないであろう。というのも，彼はすでに前167年のピュドナの戦いの折り，彼の実父アエミリウス・パウルスのもとにマケドニア王ペルセウスが投降する状況を目の当たりにしており，そのとき，パウルスが『運命』の移ろいやすさを語ったその場にいた青年将校の一人でもあり，カルタゴ滅亡直前の冬，ハスドルバルの嘆願を聞きながらもそれを無視するという状況にもあり，養祖父アフリカーヌスを凌駕するような絶頂期にあり，最も誹謗中傷されやすい時期でもあった。まさに実父パウルスはそのよい例でもあった。また，こうしたアエミリアーヌスの言動の真意を図ることに時間をかけ過ぎる余り，その真意を決することにのみ議論が集中しているが，実際史料に見えるアエミリアーヌスの言動は，ローマ対カルタゴの戦いの中でその本質的な終局を考えさせる忠告すら我々に与えているように思えてならない。

むすびにかえて

以上，縷々のべてきたわけではあるが，結局はローマの対外政策とそれに対してカルタゴの反応ということに話は尽きよう。しかしその単純かつ明快な歴史的事実の中から，我々はそのそれぞれの対応の仕方，といったものを明確に学び取ることができるのではなかろうか。ローマにはローマなりの苦心の跡が

あり，またカルタゴにはカルタゴなりの苦慮の跡があり，そこにそれぞれの人物が絡み合ってくる。一見して，簡単な歴史的事実ではあるが，しかしそこに国家間の機微，人物相互間の機微，といったものが微妙に作用していたようである。この第三次ポエニ戦争の経緯は，その点を示唆して余りあるものである。だからこそ，アエミリアーヌスがホメロスを引用したような，そうした終末が一見まことしやかに語り継がれていったりするのではあるまいか。ともかく，この戦いでローマは以後の地中海世界に君臨すべくその野心を満喫していくことになる。一方，カルタゴは地上からその姿を消し去ってしまう。しかし歴史というのは皮肉にも『ローマ』の中にまた違った形で『カルタゴ』を蘇らせてしまう。まさしく歴史の断層であろう。

第三次ポエニ戦争の経緯あるいは経過に関して，ただ単なる歴史的教訓として，これを考えるだけではなく，さらに正確に一つ一つの事実を吟味してその考えがさらに重みをなす努力はこれからも続けていく必要があろう。そこにこそ，歴史の中における『カルタゴ』の存在意義があるような気もする。

『カルタゴ』そのものを理解するうえでも，その最期は重要な意味をもってくる。つまり，その存立基盤を商業取り引きにおいていたがゆえに，軍事大国としてのし上がってきた『ローマ』とは全く違った視点を維持しており，その視点が一時的に地中海世界から姿を消してしまう，という観点でもある。商業的信用を背後の傭兵的軍事力でカバーしようとしたが，国民皆兵的な軍事力には結局歯が立たなかったことをも意味している。それでもその宿命を打開すべく最後にローマに挑んで敗れ去ってしまった。

註

1）拙稿，「カルタゴと天敵マシニッサ」創価女子短期大学紀要　第二号　1986年，161－185頁；「第三次ポエニ戦争と『脅威の釣合』論――ローマ元老院内部の葛藤――」同紀要　第六号　1989年，10-32頁。さらに，拙稿，「P. Cornelius P. f. P. n. Scipio Africanus Aemilianus――前147年のコンスル職までの経歴――」西洋史学119　1980年，58-71頁，も参照せよ。因みに史料に関しては，Polyb. 18. 35. 9 ; 34. 15. 6-16. 2 ; 36. 1-9 ; 11 f.; 16 ; 38. 1 ; 5 ; 7 f.; 9. 7 ; 10. 10 ; 14. 3 ; 16. 3 ; 18. 10 ; 19 a; 19-22 ; fr. 99, 115, 145, 192, 217, 232 ; Cic. Verr. 2. 1. 11 ; 2. 3. 85-7 ;

4. 73 f., 84, 93, 97 f.; 5. 124, 185 f.; leg. agr. 1. 5 ; 2. 51 ; rep. 6. 9 ; Tusc. 3. 53 ; Diod. 32. 1-9 ; 9 a. 2 f.; 13 f.; 16-8 ; 22-5 ; 26. 2 ; 34. 33 ; Hor. carm. 2. 1. 25-7 ; Liv. Per. 49-52 ; Epit. Oxyrh. Z. 88-143 ; Strab. 17. 832-4 ; Vell. 1. 12. 2-13. 5 ; 2. 1. 1 ; 4. 2 f.; Val. Max. 1. 1. 18 ; 2. 7. 13 ; 3. 7. 2 ; 5. 1. 6 ; Plin. NH 5. 25 ; 76 ; 7. 47 ; 10. 123 ; 15. 74-6 ; 22. 13 ; 26. 19 ; 33. 141 ; 150 ; 35. 23 ; Plut. Mor. 88 A ; 199 F-201 F ; Cat. Mai. 26 f.; Gracch. 4. 5 f.; Flor. 1. 31 ; App. Lib. 74. 338-135. 643 ; Mithr. 10. 30 ; BC 1. 103 ; Cass. Dio, 21 fr. 70. 2 f.; Eutr. 4. 10-2 ; Aur. Vict. Vir. Ill. 47. 8 ; 58. 4f. Ampel. 19. 11 ; 46. 7 ; Serv. Aen. 12. 841 ; Aug. Civ. 1. 30 ; Oros. 4. 22 f.; 5. 8. 2 ; Macr. 3. 9 ; Drac. Romul. 5. 108-17 ; Eus. Chr. 2. 128 ; [Ascon.] Verr. p. 227 Stangl ; Schol. Gronov. p. 334 Stangl ; Zon. 9. 26 f.; 29 f. などがある。

2) Werner, R., "Vom Stadtstaat zum Weltreich. Grundzüge der innenpolitischen und sozialen Entwicklung Roms", Gymnasium 80, 1973, s. 216 f.; Càssola, F., "Tendenze filopuniche e antipuniche in Roma", Atti del I Congresso Internazionale di Studi Fenici e Punici I, Roma, 1983, pagg. 35-59, esp. 47-51.

3) Walbank, F. W., "Political Morality and the Friends of Scipio", JRS 55, 1965, pp. 3, 8-11.

4) Mommsen, Th., Römische Geschichte II, Berlin, 1933, S. 22 f.; Rostovtzeff, M., The Social and Economic History of the Roman Empire I, Oxford, 1957 (ed. Fraser, P. M.), p. 21 ; Piganiol, A., Histoire de Rome, Paris, 1962, p. 119.

5) Kahrstedt, U., Geschichte der Karthager III, Berlin, 1913 [NY, 1975], S. 616 ; Gsell, S., Histoire ancienne de l'Afrique du Nord III, Paris, 1918 [Osnabrück, 1972], pp. 329 f., 335 ; Ferguson, W. S., "The Lex Calpurnia of 149 B. C.", JRS 11, 1921, pp. 98 f. Schur, W., RE 14-2, 1930, col. 2163, s. v. Massinissa ; Hallward, B. L., CAH 8, 1954, p. 476 ; Kienast, D., Cato der Zensor, seine Persönlichkeit und seine Zeit, Heidelberg, 1951 [Rome, 1973], S. 132.

6) Adcock, F. E., "Delenda est Carthago" CHJ 8, 1944／6, pp. 117f..

7) Gelzer, M., "Nasicas Widerspruch gegen die Zerstorung Karthagos" Kleine Schriften II, Wiesbaden, 1963, S. 68.; Bilz, K., Die Politik des P. Cornelius Scipio Aemilianus, Diss. Würzburg, 1933 [Stuttgart, 1935], S. 29 f.; Zancan, L., "Le cause della terza guerra punica", AIV 95-2, 1935-6, pagg. 576-8 ; Adcock, CHJ 8, pp.118 f.; Walsh, P. G., "Massinissa", JRS 55, 1965, pp. 155, 160.

8) Huß, W., Geschichte der Karthager, München, 1985, S. 436-9.

9) その詳細については，拙稿，「第三次ポエニ戦争と『脅威の釣合』論——ローマ元老院内部の葛藤——」創価女子短期大学紀要　第六号　1989年 6 月 10-32頁，を参照せよ。

10) Polyb. 18. 35. 9 : 36. 9. 4 ; Plut. Cat. Mai. 26. 3-4 : 27. 1 ; Plin, NH 15. 74-6 : App. Lib. 69. 312-3 : 34. 634. Cf. Zancan, AIV 95-2, 1935/6, pagg. 566-572 ; Gelzer, RE 22-1953, col. 108-10, s. v. Porcius 9 ; Hoffmann, W., 'Die römische Politik des 2. Jahrhunderts und das Ende Karthagos', Histora 9, 1960, s. 309-44 (= Klein, R., Das Staatsdenken der Römer (WdF 46) Darmstadt, 1966, esp. S. 185-198.) .

11) Ampel. 19. 11 ; App. Lib. 69. 314 f.; Aug. civ. 1. 30 ; Diod. 34 f. 33. 3-6 ; Flor. Epit. 1. 31. 4 f.; Liv. Per. 48 f.; Oros. 4. 23 .9 f.; Plut. Cat. Mai. 27. 1-5 ; Zon. 9. 30.

12) Hoffmann, a. a. 0., S. 218-220, 223-9 ; Gelzer, Kl. Schr. II, S. 39-72 ; Zancan, op. cit., pagg. 587-593 ; Adcock, F. E., CHJ 8, 1944/6, pp. 125 f.; Astin, A. E., Scipio Aemilianus, Oxford, 1967, pp. 276-280 ; Lintott, A. W., "Imperial Expansion and Moral Decline in the Roman Republic", Historia 21, 1972, pp. 632-4.

13) Liv. Per. 49 に至って，ようやくこの考え方に歯止めがかかったようである。Cf. Zon 9. 26 ; Astin, op, cit., pp. 276-7 ; Laqueur. R., RE 6 A-1, 2936, col. 1198, s. v. Timaios 3.

14) Astin, op. cit., pp. 278-80 ; Bilz, a. a. O., S. 22-8 ; Calboli, G., Marci Porci Catonis oratio pro Rhodiensibus, Bologna, 1978, pagg. 132-143 ; Hackl, U., "Poseidonios und das Jahr 146 v. Chr. als Epochendatum in der antiken Historiographie", Gym-nasium 87, 1980, S. 151-66 ; Malitz, J., Die Historien des Poseidonios, München (Zetemata 79), 1983, S. 364-7.

15) Kienast, a. a. O., S. 128 f.. 一方，Bilz, a. a. O., S. 19 f.. は，それを前153年に位置づけている。

16) Burian, J., 'Ceterum autem censeo Carthaginem esse delendam', Klio 60, 1978, S. 174. は，"Dies zeugt keineswegs von einer tiefergehenden Konzeption der römischen Politik in Nordafrida, sondern eher *von einer tragischen Improvisation, die mehr durch die Umstände als durch eine zielbewußte römische Aktivität bedingt war.* Die Einstellung Catos zu Karthago war ebensowenig durchdacht wie die Scipio

Nasicas.”（斜体筆者）との説明をようやくのごとく提出している。

17）Astin, op. cit., pp. 274-6 ; Harris, W. V., War and Imperialism in Republican Rome 327-70 B. C., Oxford, 1979, pp. 234-40, 271 f. Walbank, A Historical Commentary on Polybius, vol. 3, Oxford, 1979, pp. 663 f.. Cf. Bonamente, G., GIF N. F. 6, 1975, pagg. 137-69.

18）Huß, a. a. O., S. 439 : Die schwere und demütigende Niederlage, die Massinissa den Karthagern zegefugt hatte, führte zu einer Verschiebung der innenpolitischen Kräfteverhältnisse Karthagos.

19）App. Lib. 74. 339-345. 特に，74. 343 において，“*ἡ δὲ βουλὴ πάλαι διεγνωκυῖα πολεμῆσαι καὶ προφάσεις ἐρεσχηλοῦσα ἅδε ἀπεκρίνατο, Καρχηδονίους οὔκω Ῥωμαίοις ἱκανῶς ἀκολογήσασθαι.*” と。

20）Picard, G. C. C., The Life and Death of Carthage, London, 1968 [E. T. : Collon, D.], pp. 5-14, esp. 13.

21）Picard, op. cit., p. 292. ここで，‘... War then broke out, with a city named Oroscopa as the principal stake, though we do not know where it was situated’ とあり，現在の状況ではその地理的位置を設定するのは困難であろう。ただ，カルタゴ・ヌミディア間の紛争の接点にあたる地域にあったことは想像に難くない。Cf. Warmington, B. H., Carthage, NY, 1969, p. 232 ; Harris, op. cit., p. 237 n. 1 (“The topography of the campaign is unknown, but it certainly began with a Numidian raid on Carthaginian territory.” と。）その史料としては，App. Lib. 70. 319 のみである。

22）Polyb. 36. 3. 1-5 ; App. Lib. 75. 347-50. Cf. Walbank, op. cit., pp 655-6.

23）Polyb. 36. 11. 1-4 ; App. Lib. 75. 351, Cf. Walbank, op. cit., pp 670-1 ; Pédech, P., La méthode historique de Polybe, Paris, 1964, pp. 198-9 ; Saumagne, “Les prétextes juridiques de la IIIe guerre punique”, RH 167, 1931, pp. 225 f. Zancan, AIV 95/2, 1935/6, pagg. 529-31.

24）Huß, a. a. O., S. 440.

ギスゴー：CIS 1. 2. 449, Z. 3 f.; 2628, Z. 5 : 2798, Z. 4 ; 1. 3. 5822 ; RIL 842 にその別名をもとにして，叙述がある。

ミスデス：CIS 1. 2. 1446, Z. 3.

ギッリマス：CIS 1. 1. 204, Z. 2 ; 1. 3. 3427, Z. 3.

などを中心にした使節団であったようだ。

25) Polyb. 36. 5. 1-5. Cf. Huß, a. a. O., S. 441.

26) Polyb. 36. 5. 8 f.; Zon. 9. 30.

27) App. Lib. 80. 373 : *τί δὲ ὅπλων δεῖ τοῖς εἰρηνεύουσι καθαρῶς*

28) Zon. 9. 26 ; Flor. 1. 31. 7 ; Oros. 4. 22. 2.

29) Cf. De Sanctis, G., Storia dei Romani, IV-3, Firenze, 1964, pag. 36 n. 57 : ... I legati romani spediti a Cartagine per sorvegliare la consegna delle armi furono P. Cornelio Scipione Nasica Serapione il figlio di quello Scipione Nasica Corculum che si era opposto alla politica aggressiva di Catone e Cn. Cornelio Scipione Ispano cugino in secondo Calvo. ... と。その史料については，Liv. Per. 49 ; Polyb. 36. 7 ; Diod. 32. 6. 12 ; App. Lib. 78-80 ; Zon. 9. 26 ; Flor. 2. 15. 2. がある。この中で，Flor. 2. 15. 2 では，"Atquin si quis trium temporum momenta consideret, primo commissum est Punicum bellum, profligatum secundo, tertio vero confectum est."と。

30) Polyb. 36. 6. 7 ; Diod. 32. 6. 2 ; App. Lib. 80. 375. ここで，Strab. 17. 883 は，その投石器の数字を三千としている。Cf. Maróti, E., "On the Causes of Carthage's Destruction", Oikumene 4, 1983, p. 227.

31) Diod. 32. 6. 2 ; Polyb. 36. 4. 6. Cf. Walbank, op. cit., p. 657 ; Polyb. 1. 21. 6 ; 10. 18. 1 ; Liv. 30. 16. 3. そして Diod. 32. 6. 2 にみえる *γερουσία*については，Huß. a. a. O., S. 442 Anm. 42 を見よ。

32) Diod. 32. 6. 2 f. と App. Lib. 80. 376 f. を対照せよ。また，Diod. 32. 6. 3 では，Manilius となっているが，App. Lib. 80. 377 においては，Censorinus とあり，史料により自家撞着はあるが，ここでは Manilius をとった。

33) Hoffmann, Historia 9, S. 309-44. また，Huß, a. a. O., S. 442 Anm. 46 では，若干の史料を取り上げつつ，次のように示唆している。すなわち，"In Zon. 9. 26 ist die römische Forderung verschärft : zum einen sollten die Karthager selbst die Stadt zerstören, und zum anderen sollte die neue Stadt ohne Mauern erbaut werden. Nach App. Lib. 89. 418 sollten Tempel und Graber verschont werden. Eine fragwürdige Überlieferung!" と。

34) Polyb. fr. 192 ; cf. Diod. 32. 6. 3. また，Walbank, op. cit., p. 754 では，それに対して若干躊躇したところがみられる。

35) App. Lib. 80-90 ; Diod. 32. 6. 3-4 ; cf. Liv. Per. 49 ; Zon. 9. 26 ; Flor. 2. 15. 8 ; Oros. 4. 22. 3. そして，De Sanctis, op. cit., pag. 37 & n. 58 ; Huß, a. a. O., S. 442 & Anm. 48 ; cf. Noth. M., Die israelitischen Personennamen im Rahmen der

gemeinsemitischen Nam engebung, Stuttgart, 1928, s. 231 を見よ。

36) Diod. 32. 6. 4 ; App. Lib. 90. 426 ; 92. 433 f. cf. Zon. 9. 26 ; Polyb. 36. 7. 4 f..

37) App. Lib. 92. 433 f ; Zon. 9. 26 ; cf. Polyb. 36. 7. 4 f.. この叙述に関しては，App. によく述べられており，Zon. は叙述がかなり粉飾されている。

38) Cf. App. Lib. 94. 443.

39) Zon. 9. 26 ; App. Lib. 73. 335.

40) App. Lib. 93. 440. Cf. Kahrstedt, a. a. O., S. 645. 特にその兵力などについて，Kahrstedt は，Anm. 2 で，"Nach App. 93 haben die Karthager täglich 100 Schide, 300 Schwerter, 1000 Katapultengeschosse und 500 Wurfgeschosse hergestellt. Um eine irgendwie ansehnliche Macht zu bewaffnen, musste man also mindestens einen Monat Zeit haben, vermutlich noch mehr. と，App. を参照しながら述べている。

41) App. Lib. 93. 441 ; Strab. 17. 833 ; Flor. 1. 31. 10 ; Zon. 9. 26 ; Diod. 32. 9. Cf. Fantar. M., BCTH N. F. 7, 1971 (1973) pp. 248-51. 例えば，App. Lib. 93. 441 を見れば，*θυρεοὺς ἑκατὸν ἡμέρας ἑκάστης καὶ ξίφη τριακόσια καὶ καταπελτικὰ βέλη χίλια, σαυνία δὲ καὶ λόγχας πενκακοσίας, καὶ καταπέλτας ὅσους συνηθεῖεν*. とあり，つまり毎日盾100に，剣300，投的1000，槍500を製造し続けていた。因みに，その当時のカルタゴの人口を見れば，Strab. 17. 833 によって，70万の人口があったとあるが，Lassere, J. -M., Ubique populus. Peuplement et mouvements de population dans I'Afrique romaine. ... Paris, 1977, pp. 37-9, 43 f., 49 によれば，それはただ単に都市カルタゴだけでなく，その周辺部も含んだものであろうとしている。

42) App. Lib. 94. 446. *ἐκ μόνης ἔχοντες Ἀδρυμητοῦ καὶ Λέπτεως καὶ θάφου καὶ Ἰτύκης καὶ Ἀχόλλης*. とある。

43) Beschaouch, A., Africa 3/4, 1969/70 (1972) p. 121 f. では，ネフェリスを現在のヘンヒール・ボウ・バカール Henchir Bou Bakar と特定しているが，Kromayer, J. -Veith, G., Antike Schlachtfelder, Bd. 3-2, S. 712. も参照せよ。

44) この地域は，アガトクレスがカルタゴとの戦いに従事したときに，乗り込んできた地域と類似した機能をもっているのではないか。

45) 拙稿，「カルタゴと天敵マシニッサ」創価女子短期大学紀要　二号，1986年，161-185頁を参照せよ。さらに，Walsh, JRS 55, 1965, esp. 150 ; Huß, a. a. O., S. 444.

46) App. Lib. 90. 426.

47) Grob. H. K., Die Belagerung von Karthago im dritten punischen Kriege (149-146 v. Chr.) Diss. Leipzig, 1921 [Jahrbuch d. Phil. Fak., Leipzig, 1922, S. 45-8].

47a) その名に関しては，Boissevain, U. Ph., ed., Cassii Dionis Cocceiani Historiarium Romanarum quae supersunt I, Berolini, 1895 [1955], p. 308.

47b) その地理的位置関係など詳細については，Huß, a. a. O., S. 445-6 を見よ。Cf. Kahrstedt, a. a. O., S. 649.

48) Dorey, T. A. & Dudley, D. R., Rome against Carthage, London, 1971, p. 164.

49) 拙稿，西洋史学119，1980年，63-5頁。

50) Dorey & Dudley, op. cit., p. 165. にはいささか誇張のきらいはあるが，以下のように述べている。"There seemed little, indeed, that Scipio could not do : he even induced Cato to quote Greek. The Man of Destiny was on the stage." と。また，一般的にアエミリアーヌスの性格に関しては，Polyb. 31. 23-30 ; cf. 18. 35. 9-12 ; 35. 4. 7-14 を，そして Bilz, a. a. O., S. 31-4 ; Astin, "Scipio Aemilianus and Cato Censorius", Latomus 15, 1956, pp. 159-80 ; id., Scipio Aemilianus, pp. 280 f. なども参照せよ。

51) Broughton, T. R. S., MRR 1, p. 461. アーフリカー派遣はカルプルニウス・ピソーのみ。そのピソーについては，Astin, Scipio Aemilianus, pp. 56 f. を見よ。

52) Polyb. 36. 16. 特に，36.16.1には，*ὅτι Μασανάσσης ὁ ἐν Λιβύῃ των Νομάδων βασιλεὺς ἀνὴρ ἦν τῶν καθ' ἡμᾶς βασιλέων ἄριστος καὶ μακαριώτατος*. とある。

53) ここで，その解決策の詳細に触れるのは，本稿のテーマとは直接関係がないので，省略するが，概略を述べておけば，ミキプサには，王宮とキルタの後継を，グルッサには，外交政策の後継を，そしてマスタナバルには，正義の施行を，といったふうにそのそれぞれの性格に応じてマシニッサの後継者となるような解決法を採った，とされている。Cf. Warmington, op. cit., pp. 223-42 ; Dorey-Dudley, op. cit., pp. 153-74. などを見よ。さらに，Huß, a. a. O., S. 447. ではそれを端的に，"Micipsa erhielt das 'Innenministerium', Gulussa das 'Kriegsministerium' und Mastanabal das 'Justizministerium'." 述べ，Anm. 79 にはさらに説明的に，"Möglicherweise hatte diese Dreiteilung der Gewalt im numidischen Bereich gewisse Vorbilder. Vielleicht ist hier auch an die Institution des Trisufetats in numidischen Städten zu erinnern. In jedem Fall lag die Teilung der Macht im römischen Interesse." と。

54) 例えば，loc. cit., p. 167 などの考え方には大いに疑問が残る。

55）拙稿，西洋史学 119, 65-70 頁を参照せよ。

55a）その地理的位置については，Groh, H. K., Jahrbuch d. Phill. Fak., Leipzig, 1922, S. 47 f. に，“in der Nähe von Kap Karthago. ... und zwar etwas nördlich des heutigen Leuchtturmes von Sidi bou Said.” と説明されている。

56）App. Lib. 114. 539-44 ; Liv. Per. 50-1. そして，ローマ軍の士気回復の神話については，App. Lib. 115. 545-116. 553. 特に，116.547-53に至るアエミリアーヌスの演説の報告を参照せよ。

56a）App. Lib. 114. 544 ; Huß, a. a. O., S. 451 Anm. 100.

56b）Kahrstedt, a. a. O., S. 659 ; Huß, a. a. O., S. 451 Anm. 101.

57）Polyb. 38. 19. Cf. Walbank, op. cit., pp. 718-20.

58）App. Lib. 119. 563-120. 568. 例えば，120.568では，“*καὶ τοῦτο πρῶτον αὐτοῖς καὶ μάλιστα ἐγίγνετο λιμοῦ καὶ κακῶν αἴτιον*.”というふうに。

59）その構築物の詳細については，Baradez. J., “Nouvelles recherches sur les ports antiques de Carthage” Karthago 9, 1958, pp. 45 ff. を参照せよ。そこで，App. の数値を基にして計算され，その大堤防が12000m³から18000m³にいたる巨大な丸石を置き，連累していた，と。

60）ともかくその件に関しては，Dorey & Dudley, op. cit., pp. 169-70 ; cf. Warmington, op. cit., pp. 223-42 ; Picard, op. cit., pp. 285-97. に詳細な説明があるので，参照されたい。

61）Polyb. 38. 7. 1-8. 15.

62）Macrob. 3. 9. 7-8. それは前400年頃のこととされるのだが，「おお全知全能の神よ，この都市と人々を保護下においていた神よ，私は汝，神が都市カルタゴとその人々を見捨てて，その地にある神殿そして聖なる地，さらには都市そのものを捨棄し，そこから出て行くことを祈念し，懇願し，その恩恵に浴しよう。それで人々は恐怖，脅威そして怠慢に陥ることを，そして捨棄された後，私や私の人々，つまりローマにやってくる。……そしてもし汝，神がこれらのことをし終えたなら，私は神殿などが汝，神に栄光を与えるように約束しよう。……」（趣意）と。Cf. Wissowa, RE VI-1, 1907, Coll. 1152 f., s. v. Evocatio ; Serv. Aen. 12. 841.

63）こうした型式については，例えば，前396年にカミッルスによってウェイイーの都市を攻撃するときに用いられ，また前70年にティトゥスがイェルサレムを攻囲したときに，神々が自発的に都市から脱出した，と伝えられている。

64）Plut. Ti. Gr. 4. 5 f. によれば，このときカルタゴに最初に入ったローマ人は後の

歴史家ファンニウスと若きティベリウス・グラックスであった，と。

64a) App. Lib. 133. 631-2.

65) App. Lib. 128. 610-130. 624. 特に，130.620.には，“Σκιπίωνος δ' ἀπαύστως ἐφεστῶτος ἢ διαθέοντος ἄυπνου, καὶ σῖτον οὕτως ἐπὶ τῶν ἔργων αἱρουμένου, μέχρι κάμνων καὶ παρειμένος ἐκαθέζετο ἐφ' ὑφηλοῦ, τὰ γιγνόμενα ἐφορῶν.”と，アエミリアーヌスの行動に説明を加えている。

66) App. Lib. 129. 614-9 に，その現場を彷彿とさせる描写がある。

67) App. Lib. 130. 622. しかし，Flor. 1. 31. 16 には，三万六千名，Oros. 4. 23. 3 には，男子三万名と婦女子二万五千名とある。

68) Cf. Cic. Tusc. 3. 53 ; Oros. 4. 23. 2 : 7 ; Zon. 9. 30 ; Polyb. fr. 115.

69) Liv. Per. 51 ; Val. Max. 2. 7. 13 ; cf. Walbank, op. cit., p. 721. そしてハスドルバルの妻の最期については，Polyb. 38. 20. 7-11 ; App. Lib. 132. 628 ; cf. Zon. 9. 30 を見よ。